International MRA Association of Japan

IMAJ

NEWS NO.93

（社）国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　2000年 7月21日
発行所　（社）国際MRA日本協会
150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802
TEL:03-5721-6861 FAX:03-5724-6880
E-mail: LEB03055@nifty.ne.jp
発行人　相馬　雪香
編集人　長野　清志
頒　価　1部200円

July 2000

The Global Caux Round Table Meeting

コー円卓会議 ～“節義あるビジネスリーダーシップ”で社会をよりよくするために

稲岡 稔（イトーヨーカ堂 取締役）

私は、いまだに、あの2年前の夏の日の感動を、忘れることができません。

いや、その感動は、いまも私の心の中で、日ましに強くなっているようです。

98年7月19日の日曜日、私はジュネーブからタクシーでコーのマウンテンハウスに着きました。

翌日朝、会議が始まった時から、その感動が、そして頭と心のすべてがリラックスできる“居心地の良さ”が私を包み込んでしまいました。

そうした感動とくつろぎ、あるいは癒される気分、といってもいいかもしれませんが、それは私にとって、全く初めての体験でした。

そして後になって、それがCRTの活動の場であるMRAの、多くの人々の心の結集からくることに気づいたのです。

コー円卓会議（The Global Caux Round Table Meeting; The CRT）は、1986年、日本のエレクトロニクス製品の“集中豪雨的”輸出と、それに反発する米、欧産業界の“日本たたき”のさ中、MRAの活動の一部として日、米、欧の産業人をコーに集めて開かれ、それから途切れることなく毎年さまざまな会合が続いています。

最初の年の会議の第一日は、日本を非難する米、欧のビジネスマンたちと、これに反論する日本の産業人との激しい口論に終始したと、ある先人が語っておられます。

そしてその夜、MRAのスタッフの方々が、ひと部屋ずつドアをノックして回り、“相手を非難しないこと、誰が正しいか、を問わないことがMRAの原点であること”を、説いて回ったといいます。

先人たちの偉大なところは、多くの参加者がその忠告に素直に耳を傾け、心を転換させたことでした。そしてMRAでつながれた心の結集は、いま、CRTで年ごとに強まっているように私には思えます。

初めは貿易摩擦が主たるテーマでしたが、やがて企業のあり方、企業行動で社会をよりよくする方法へと、徐々に活動のモメントが移ってゆき、'94年にはいまも唯一の国際

■主な内容■

◆コー円卓会議 Principled Business Leadershipで社会をより良くするために ・1-2P
◆グローバル・コンサルテーションに参加して ・2-3P
◆オーストラリア・スタディーコースに参加して ・4P
◆母親心理学訓練講座から ・4P
◆21世紀に向けて ・5P
◆MRAワールドニュース 世界のMRA-最近の動き ・6-7P
◆MRA小田原サークル活動リポート ・8P
◆事務局便り他 ・8P

的なビジネス原則として輝き続けております「コー円卓会議・企業の行動指針」が採択されました。

私はコーでの全体会議には2回しか参加しておりませんが、もう10数年も参加してきたような気分でおります。いつのまにか、気がつくと“Global Steerling Committee”（国際運営委員会、とでも申しましょうか）の一人に選ばれ、その活動に深く関与させて頂くようにもなりました。

私がずっと感じ続けております感動と、やすらぎの源は、それぞれ責任ある地位にある産業人たちが、国籍や信仰の違いに全くとらわれることなく、おたがいへの深い尊敬と、それぞれの使命を共有していることの強い連帯意識、といったものをもち続けていることだと考えています。

そしてＣＲＴの理念は“Principled Business Leadership”と表わされており、わが国では“節義あるビジネス・リーダーシップ”と一応は簡潔に呼ばれておりますが、その意味は、いわば「明確な理念を持った産業界のリーダーシップで、社会を高潔、公正な方向へと変えてゆこうとする意志」といったことなのか、と、考えています。

これまでに40人ほどが文字どおりの“円卓”を囲んで会議し、それに多くのスタッフやベテラン通訳家の方々が協力してこられました。そして昨年からことしにかけて、多くの人々の献身的なご努力により、何回かの運営委員会を経て“社会をより自由で公正で透明な方向へ変えてゆくための産業人の運動体”へと、生まれ変わりつつあるところです。

ことしからは参加者も増えるでしょうし、ことしは初めてコーを離れ、9月にシンガポールで世界大会を開くことになっています。

コーのマウンテンハウスは、部屋から目の下にレマン湖を見わたせ、東のかなたにはスイス・アルプスをながめられる、すばらしいところにあります。

夕食が終わったあと、9時ごろになってようやく訪れるたそがれ時、ベランダのいすに座って一日の会議を振り返るのも楽しい時間でした。

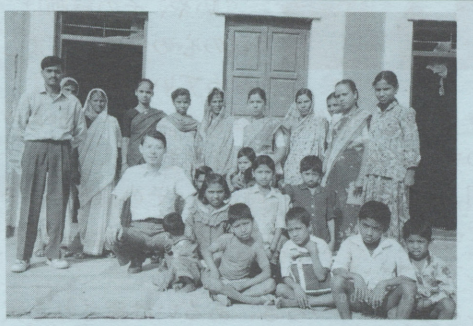
コーを離れるのは少しさみしい気もしますが、ここで組織を再編し、スイスに本部を置いた世界組織になる計画が進んでいます。またコーに集まる日がくることでしょう。

これからのＣＲＴは、社会をよりよいものに“変える”ために、大きな力を発揮することになるでしょう。参加者の一人として、本当に楽しみなことです。

〈インド再訪〉発見と再発見の旅

MRAグローバル・コンサルテーションに参加して

アジアセンターODAWARA
所長　中山　啓介



● 訪れたプネ郊外の農村で

私は、去る2月4日から11日までの8日間、インド・パンチガーニで行われたMRAのグローバル・コンサルテーションに参加させていただいた。5大陸28か国より38名が出席。日本からは唯一の参加者。

私にとっては、36年ぶりの再訪。前回（初回）は、1963年11月から翌年にかけての2か月間。R.ガンジー氏の要請を受け、MRAミュージカル“Across the Rubikon”（日本名「乾坤一擲＝共産主義を越えて革命へ」）を携えての訪問。ニューデリーを初め、北部の主要都市を巡り、主として大学で公演し、好評を博した。

今回は前記の会議出席後、できる限り生のインドを実地見分することを課題とした。ムンバイ（旧名ボンベイ）の近くプネ市（人口250万、第9位の大都市）では、学校訪問、工場訪問、農村開発に取り組むプロジェクト村の見学や、ライオンズクラブの訪問。この間、MRAのチームミーティングや産業人向け一日セミナーにも出席。その後、再度パンチガーニに戻り、3泊4日で開かれた産業人向け『創造的リーダーシップ訓練セミナー』に参加。また、滞在期間中、インド文明の根底をなすヒンズー寺院の奥の院に分け入り、御神体を拝す。世界最大を誇る映画産業の花形映画も鑑賞した。底流をなす古き伝統の中に、たしかに新しい変化の潮流がこのインドに起きている。私のインド観は一変した。インド滞在後、足早にバングラデシュ、ミャンマー、タイを巡り、私のこのインド観は確信に変わった。

21世紀はアジアの世紀だといわれる。20世紀最後の四半世紀、発展の中心はタイを中心とする東南アジア。その前の四半世紀、発展の中心は何と言っても日本とドイツの戦後復興。その後の日本の高度成長は東アジアに波及し、東南アジアに及ぶ。来る21世紀、この波は南アジア・インド文明圏を巻き込むだろう。その上に壮大な文明の華が開く。

それには日本とインドとの戦略的提携がカギを握る。両国の戦略的パートナーシップは実に偉大な可能性を秘めている。

三つの可能性

一つは、近代産業の花形であり最も裾野の広い自動車産業。今回、特に目についたのが新しい乗用車の増え方。トップブランドは何とマルテイ・スズキのZEN（1.6L車）。かって自動車産業に関わった者としてうれしい限りだ。スズキはその先駆として、10数年前からインド政府との間に合弁事業を展開中。この2年間、日米韓伊の主要メーカーが挙って進出し、その生産能力は一挙に年間40万台に飛躍した。そこでの経営ノウハウは日本の冠たるTQCやTPM。その根底にある人間主体の経営思想。

現実面での豊かさと共に、それを実現させた日本的経営思想や哲学がインドの精神的伝統に新しい光を当て、優秀で意識の高いインド人の内面を次第に覚醒させつつある。その確かな証拠と証言を、工場の中で、産業人セミナーでの交流の中で体験した。

二つめは、インドの農村開発にみるNGO分野に於ける日本の関わりだ。その具体例を実際に見分した。それを主宰するのはアーミン・モディさん。日本でも数年間英語教師をされ、私どものLIOJでも教えていただいた。彼女が滞日中発足させた「あしたの会・日本」は、5つの支部を有し、資金と器材の援助をしている。目的は、インドの農村女性の自立支援。保健衛生を始めとする識字教育、裁縫・編物の職業教育、日本の無尽講に似た自主金融組織の設立と運営など。彼女は1年半前より、故国インドに帰り、このプロジェクトをスタートさせ、併せてインドにも「あしたの会・インド」を誕生させた。民間人によるイニシャテイブを軸に、他のNGOや政府の協力も得ながら着実に成果を上げつつある。そこでは、日本人の善意と資金が最も有効に活用されている。対象の村々を巡り、これに取り組む農村女性達の輝いた表情と交わした対話の中に、私は大いなる希望と可能性を見出した。

三つ目は、MRAに関してである。今回の8日間の会議は、世紀の変わり目、2000年紀の節目ということもあり、一昨年60周年を迎えた世界のMRA運動の総括と現状分析、今後の方針の設定という意味を持っていた。結論的にいえば、MRA運動は新しい進化発展の段階にある。そのための精神的脱皮、それが今回私自身が経験したことだ。その基本的方向は、新化と深化と芯化であろう。

新化とは、従来、ややもすれば国ベース、リージョナルなベースでの活動に終始して来た。これを新しい時代の潮流である、グローバルな活動体に新化させていくこと。また、従来、ともすれば西欧的・キリスト教的色彩が強かった。これに対し、ヒンズー、イスラム、佛教、神道の要素とも交流し合い、ある種の融合の場が醸成された。その意義と今後の広がりの可能性は大きい。

深化とは、上記の精神的レベルでの朝夕の深い交流を通じて、MRAの名前の原点である Moral & Spiritual Re-Armamentの意義を体験しあえたことであろう。お互いが自分の人生とその内面（時には信仰面）を顕し分かち合ったこと、さらに共に祈るという共通体験。それらを通じて自然に生まれた人種・宗教・世代・性別を越えた、豊かな精神的紐帯の誕生とその実感。

芯化とは、MRAの原点である「人が聴くとき、神は語る。人がそれに従うとき、神は働く。人々が変わるとき、国は変わる。国々が変わるとき、世界は変わる」ことを、人生の基本に据えて、一人一人が内なる声に耳を傾け、それを着実に実行すること。自分から始めること。これこそがMRAの原点であり、永続性をもった真の革命である。

日本とインドとは、このMRAを通じても世界に大いなる貢献ができる。さらにオーストラリアと組んでこれを機軸に3国が提携すれば、その可能性は無限に大きくなる。まさに次代を切り開くパワーを持つであろう。

今回の会合で確認されたこと

1．Global Hohoの開催
（インドの地方語ナガランドの言葉で『祭り』の意味）
2001年12月28日～2002年1月25日（予定）
（12月28日～1月10日をピークタイムとする）
インド・パンチガーニで世界中のMRAに関わる人達の集いとする。　限定400人。
（事務局注：この集まりに関心のある方はＭＲＡ事務局までご連絡下さい。）

2．青年の訓練計画“Action 2000”
本年9月より開講。期間は1年間。目的は、35才以下の男女を対象に、将来のMRAの運動を担う人材の養成。向こう5年間の取り組み。主たる会場はインド・パンチガーニとインド国内及びアジア各国のフィールド。
（事務局注：諸般の事情により、このプログラムは延期されることとなりました。新しい日程に付きましては、決まり次第改めてお知らせいたします。）

● グローバル・コンサルテーションの参加者

オーストラリア・スタディーコース『効果的な生き方』に参加して

前田　政史

今回のスタディコース（2月6日～4月8日）に参加する前、私はMRAについて詳しい知識がありませんでした。しかし、今回このコースに参加してその一端を知ることができました。

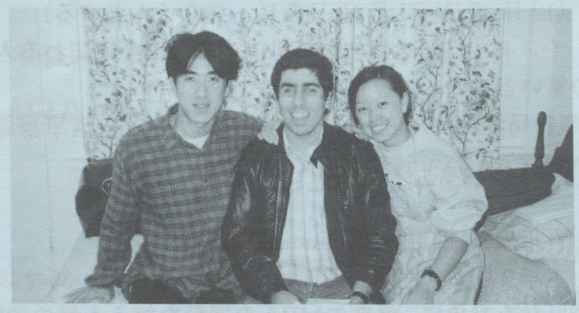
私は困っている人を助けることに喜びや嬉しさを感じます。そしてその様なことが実感できる仕事に就きたいと思っています。特に民族紛争や難民問題に関することに興味があり、何かをしなければならないという思いに駆られています。今回のスタディコースでは独立問題や内戦問題などに関しても勉強できたのでとても良かったです。例えば、インドとナガランドの間の独立問題やパプア・ニューギニア（ブーゲンビル）の内戦問題などです。その国の参加者達が自らの心情や経験を語ってくれましたので、彼らの想いや国の状況などを詳しく知ることができました。こうした貴重な経験を基に、これらの問題に対する解決策を見出して行きたいと考えています。

その他、オーストラリアのアボリジニについての話を聞き、その悲惨な歴史に触れ深い悲しみを感じました。現在ではお互いに理解しようとする運動が行われています。実際にアボリジニの人から話を聞いたり、その運動についても勉強しました。これはとても難しい問題ですぐには解決できませんが、続けて考えていくべき問題です。解決のためには、お互いの意見や考えを尊重し会うことが大事だと思いました。

今回10数ヶ国からの参加者がいて、彼らから色々な考え方や価値観を学びました。日本人である私には理解しづらい所もありましたが、それらを否定してはいけないという大切さに気付き、自分自身も成長できたと感じました。特に宗教については多くを学びました。参加者たちの多くはクリスチャンでしたが、私は一般的な日本人と同じように特定の宗教を持っていません。しかし、言葉や宗教は違えども道徳観や倫理観などは同じだということが分かったのは、大きな収穫でした。

20世紀は宗教上の対立や民族間の紛争など様々な争いがありました。けれど、異なった価値観を認め合い共有することを忘れずに生きていけば、より良い世界が訪れるはずです。今回のコースに参加することによって、それが実感できたことは私にとって素晴らしい経験になりました。この貴重な体験を将来の自分に活かしていきたいと思います。

最後にこのコースに参加する機会を与えてくれた人達やコースを運営してくれた人達に深く感謝したいと思います。



●コースの参加者と、一番左が前田さん

●各国からの参加者と共に

母親心理学訓練講座

故山崎房一MRA協会理事の始められた母親心理学訓練講座は、現在も高柳静江さん他の講師の方々に引き継がれて全国各地で開催され、子育てに悩むお母さん方の大きな助けとなっています。高柳静江さんが発行されている『おかあさんのネットワーク通信』24号の記事の一部をご紹介致します。尚、母親心理学訓練講座に関してもっと知りたいという方がございましたらMRA事務局にご連絡下さい。

『娘は、小5より父親と口をきかなくなりました。その上、父親の入ったお風呂の後には入らなくなり、現在にいたっています。その原因が「今まで私が、夫を見下していたことに起因している」と気付きました。見下しとは、自己不信の人が、自分の安全をはかる為、相手を軽蔑したり、否定したりすることです。

この見下しは、私の母が、父にとっていた行為と全く同じです。これを私が引き継ぎ、何十年と夫に対してやってきました。

娘の件で、私は夫に謝り、許しをこいました。夫も許してくれました。夫の喜びが、私にも伝わり、心が安らかになりました。そのお陰で、今まで不眠で毎晩薬を常用していたのに、その日から不要となりました。何代も続く見下しを、私の代で、きっぱりとやめました。』

（Wさん）

21世紀に向けて

社団法人　国際MRA日本協会会長
相馬　雪香

●去る3月22日に開かれた相馬会長の米寿を祝う会にて谷川和穂衆議院議員と共に

日日々々に積る心のちりあくた
洗い流して我れを尋ねん
二宮尊徳翁道歌

我れを尋ねる。自分は何を目的に、何を基準にしているのか、自分の本心は中々分りにくいもの。その原点に立って新しい千年を迎えようと思いました。

折りも折り、二十世紀最後のチエリストの一人ロストロポーヴィッチ氏と日本が世界に誇る数少ない人、小澤征爾氏との共演で「善意と友情のチャリティ・コンサート」が難民を助ける会の主催で去る二月十二日に行われました。純益はすべてサハリンの孤児院を中心に送られますが、こうしたチャリティの純益にも課税するという今までのしきたりを変えることが出来たことも特筆に値いすることでした。

国境を越え、人種を越え、立場を越えて「心と心を結ぶ」善意の波動が満ち溢れ、素晴らしい演奏と相まって会場を埋めつくした観客は深い感動に包まれていました。前回モスクワで行われた二人のコンサートにはエリツィン大統領と橋本龍太郎前首相が出席されました。今回も橋本龍太郎氏は名誉会長をひき受けておられます。

私はこのコンサートに先だって読んだNHKモスクワ前支局長とロストロポーヴィッチ氏の会話の一くだりに感動しておりました。ロ氏はソ連時代に反逆者の汚名を着せられ、収容所にも入れられていた作家ソルジェニーツインを弁護して、別荘にかくまったりした為、あらゆる嫌がらせの上国外追放になっていたのです。「ずい分勇気があったのですね。その勇気の源はどこから？」との問いに「良心に背きたくなかった」と答えています。

良心に背かない、良心に従う。かって加藤シヅエ先生が党議に背いたとして懲罰委員会に付せられた時、「良心に従った」と答えられたことを思い出しました。

私はそんな立場の人じゃない、と逃げ口上がのどの奥からせり上がってきます。たとえ大きなことは出来なくてもいい、それぞれの立場で毎日の生活の中で判断しなければならないこと、しなければならないこと、その折々にこのことばを思出したいと思います。日本中の一人々々が少しでもいいから実行したら、日本は、日本の社会は良くなることでしょう。

MRAワールドニュース

世界のMRA - 最近の動き

■ウガンダ

流血の大陸から生まれ変わった大陸に

去る5月31日から6月4日にかけてウガンダの首都、カムパラで開催された汎アフリカMRA会議にウガンダの大統領夫人から寄せられた次のようなメッセージが法務大臣によって代読されました。「MRAは人格を作り上げることを目指すという点において重要です。私達は、暴力と、貧困と飢えの悪循環にはまり込んでいるようです。アフリカは世界の中で唯一の流血の大陸となっています。アフリカも世界の問題も全て人間によって引き起こされたものであり、従ってその解答も私達の中に存在するのです。私達一人ひとりが内なる心（神）の声に聴き従うならば、必ずやこれらの問題への解答を見出すことでしょう。」

会議には16ヶ国からの参加者がありました。キガリ独立大学の学長を初めとした10名のグループがルアンダからバスで来ましたが、その中には、コンゴ人が3名、ブルンジ人が1名含まれていました。コンゴでルアンダとウガンダの軍隊の衝突があったため、当初その旅行を躊躇しましたが、その問題に当該国に住む者として取り組む必要を強く感じて予定通りに参加したとのことです。

政府や教会関係者等多くのウガンダからの参加者があり、テレビやラジオで参加者のインタビューが会議の前に行われると共に、毎日、夕刊紙で会議の様子が報道されました。

会議では次のようなテーマで話し合いが行われました。

- 汚職－社会のモラルを食いつくす癌
- 宗教の相違点を明らかにする中から信仰を実際に役立つものとする
- それぞれの家族・家庭の責任をまっとうした上での自由
- リーダーシップの清廉さ
- 環境を癒す

「人類への脅威-エイズ」というパネル・ディスカッションも開かれ、エイズへの注意の喚起と予防のために活動している青年のグループも参加しました。

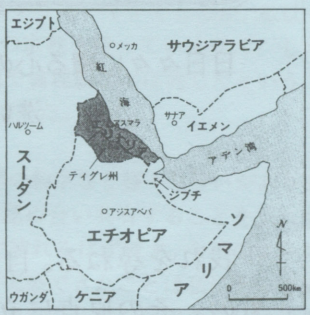
ルワンダの代表からは、来年の5月にこの汎アフリカMRA会議を、ルワンダで開催したいとの発表がありました。

（リチャード・ウイークス　カナダ・MRA専従）

■ヨーロッパ

アフリカの角からヨーロッパへ

昨年のスイスMRAの世界大会の『和解への課題』のセッションに参加した、エチオピアの著名なジャーナリスト、アト・マモ・ウネ氏から、“アフリカの角”の地域のニーズについてヨーロッパの人々に話を聞いて欲しいとの呼びかけがありました。



アフリカの角周辺地図

そこで、ヨーロッパのMRAのチームのアレンジで、5月にこのエチオピアのジャーナリストとエリトリア、ソマリア、そして、ケニアから各1名、計4名のグループが2週間半にわたりヨーロッパの7つの都市を訪れ、政治家やNGOの人々、そして、ヨーロッパに亡命を強いられた、それぞれの国の人々のグループと会いました。オープンに、そして真摯に自分たちの苦しみとその地域のビジョンについて語った彼らの話を、大臣や役人の人達も感激して聞き入りました。

この4人とも命懸けで平和を追求しています。ケニヤのキプラガット氏（元ケニア外務省事務次官）は、前に同じことを試みて殺された人が2人いたにも拘わらず、ジャングルに分け入り、モザンビークの反政府派の人々と親しくなりました。元ソマリアの大使であったアル・ザハリ氏は、政変による6年間に亘った独房への収監から解放された後、ソマリアで互いに敵対している各派をまとめようと献身しています。エリトリアのフェセハァ氏は、1971年にエチオピア軍に近親者25名を虐殺されたにも拘わらず、エチオピアとエリトリアの和平のために一貫して働いて来ました。

ジュネーブでフェセハァ氏とマモ・ウネ氏はエチオピア人の大きなコミュニティを訪ねましたが、彼らがエリトリア人とそのような形で合うのは初めてのことでした。そのグループがストックホルムに到着した頃、エチオピアとエリトリアの国境で再び戦闘が始まりました。それでも、ソマリア、エチオピア、そして、エリトリアというストックホルムでの3つのコミュニティの人々が、初めて共に昼食会に集まりました。エリトリアのフェセハァ氏が戦争でエチオピアの人達が苦しんでいることに対し謝罪したことは、それぞれのコミュニティの人々に劇的とも言える影響を与えました。

ミーティングの後、三名は共々、この様な会合が継続できるよう助けてあげて欲しいとMRAのチームに要請しました。ドイツでこのグループは、公用語のアムハラ語でエチオピアに向けて放送する番組のための収録をしました。又、ロンドンでは、BBCが彼らの、アフリカ、そして、ソマリアでのプログラムについてインタビューを行いました。

■レバノン

軍隊の司令官が公に謝罪

レバノンでも、15年間続いた内戦の傷を癒すため、イスラム教徒とキリスト教徒のMRAの友人達が活動しています。去る四月にベイルートの新聞は、レバノンの政治状況を健全化させるのに必要な正直さと自己批判に基づいた'真の和解'を体現した団体としてMRAを紹介しました。キリスト教徒である元軍隊の司令官アサド・シャフタリ氏が、内戦中に犠牲になった人達に公に謝罪したきっかけはMRAでした。彼は、2月10日にアルナハ新聞に、「キリスト教を守るんだと思い込んでいたにも拘わらず、実は、暴力を行使しない完全なる愛の精神を持つ、そして、他の人々を愛するという本当のキリスト教の精神を実践していなかったことを反省し心より謝罪します。」と書きました。

エルサレムのボストン・グローブ紙の特派員がベイルートを訪れ、彼にインタビューをし、『レバノン人の謝罪が内戦の沈黙を破る』という見出しの記事を一面に掲げました。

レバノンにおいては、彼の謝罪は、一部の人々からの批判はあったものの、多くの人々から感謝の気持ちをもって受けとめられました。他の新聞の取材に引き続いて行われた、テレビのインタビューでは、彼の心境を変えるための支えとなったMRAについて質問を受けました。

奥さんも彼の思いきった謝罪を大いに支持しました。ティンエージャーの息子は、「学校の先生達や生徒達も皆、お父さんのしたことを、自分同様、誇りにしている」と言いました。しかしまだ、彼の心の中では、葛藤が続いています。その謝罪文の最後のセンテンスは、「他の人々同様、私の心の傷も癒されるよう神に祈ります」と結ばれています。

私達は、このシャフタリ夫妻から次世代のキリスト教徒とイスラム教徒間のお互いの偏見を払拭するための色々な新しいアイデアを聞いてとても感動しました。

この夫妻は10年以上にわたり、彼が確信と勇気をもって謝罪できるようになるまで静かに心を遣い続けてくれたMRAの友人達に感謝していました。

戦後、フランスのイレーヌ・ロウ夫人がドイツ人に謝罪したことが独仏両国及びヨーロッパの融和のために大きな影響を与えたように、彼の謝罪は中東において同様の融和をもたらす可能性を秘めていると言えます。

（ピーター・エバリントン夫妻、イギリス・MRA専従）

■コロンビア

全てのコロンビア人のために共に働く

コロンビアで3週間を過ごした後、私達が如何なる危機的な状況の中に踏み込んでも、MRAの訓練のお陰で適切な貢献ができるという事実に改めて感心させられました。亡くなった主人のピーターと私は30年以上にわたり接触を保った結果、多くのコロンビア人との間に深い友情と信頼関係を築くことができました。

コロンビア周辺地図

コロンビアは山国で、フランスの2倍の国土を持ち、35年にわたりゲリラ闘争に苦しんできた国です。麻薬のマフィアと共に、軍が機能していないとして結成された準軍事的勢力の存在が更に状況を複雑にしてきました。

政府はしばしば汚職のスキャンダルにまみれ、信頼を失ってきました。　それにも拘わらず、色々な場所に清廉な人々が存在し、本当の愛国者たちを結集させる見えざる磁石を求めてきたのです。

2万余りの会社がたちゆかなくなるという経済危機もあります。しかし、確かな変化も認められます。今までは自分たちの投票が何の意味も持たないと思っていた庶民が声をあげ始め、平和を求めるデモも数多く見られます。軍隊も人間性を回復しつつあります。教会もただ説教をするのではなく、台座から降りて、奉仕し、キリスト教の真の教えに生きようとし始めています。

MRAのメンバーたちは、政界や色々な社会的組織でこれらの変革をもたらそうと活動しています。又、巨大なスラム地区で、『平和の創造者』という旗印を掲げて活動している人たちもたくさんいます。そのお陰で、そこで頻発する暴力事件を避けるため逃げていた多くの人たちが戻ってきました。　この活動は、非常にダイナミックな若い女性がリードする「ニューライフ」という組織が行っていますが、そこでは、オランダの人たちのサポートを得て、中等教育を終えるため20人の青年たちが週末に勉強もしています。

これは彼らから寄せられた感謝の言葉です。「あなたがたMRAの人たちが開いてくれた、対話、平和作り、そして家庭・家族の価値といったセミナーに参加して、この暴力に満ちた状況から人々を救う活動に踏み出す勇気を与えられました。私達の考え方も変わり、今では全てのコロンビア人のためにより良い世界を作るために共に働こうと思うようになったのです。」

（ディグナ・ヒンツェン・フィリップス　オランダ、MRA専従）

MRA小田原サークル活動リポート

世話人代表　二宮　秀夫

小田原は問題のまちではなく解答のあるまちにしよう、と草の根運動として始めました。

6年目に入ります。アジアセンターで月1回例会を開き、いろいろ異なった背景に生きている人々が体験を通じ、意見の交換をしております。問題への解答は、自分のチエンジにあります。2時間から3時間の会合ではどうしても意見の交換で終わることが多いので、昨年の10月30日・31日には1泊研修を行いました。世界的視野の中で、足元の問題にどう取り組むか、参加者8名で静かな時間を持ちながら深い対話が行われました。

地方分権の時代に入ります。まちづくりは人づくり、良心に導かれて生きる人をつくることが、まちを変える根本だと信じて励んでおります。この草の根運動は、家庭で集まり小グループでできます。経費もかかりません。全国に広がり、日本が生まれ変わることを願って試行錯誤しつつ、工夫をして行っております。

少しずつまちの中が変わりつつあると思う事例を具体的に列挙してみますと、

①MRA国際会議やAPYC（アジア太平洋青年会議）への地元としてのサポート
②市民活動との連携（地球市民フェスタに参加、ゲームセンター出店の青少年への悪影響防止運動に参加）
③教育現場の改善について話し合い、教育者が学校で実践
④商工会議所活動の中でのある種の変革。知らない内にモノゴトが決められる悪習から議して決する方向への転換
⑤市政への市民参加度は全国でも上位になったこと
⑥二宮尊徳先生の報徳の教えの研究と報徳団体への働きかけ
⑦自分の経営する民宿という事業を通じて国際交流への貢献
⑧婦人サークルとの関わりの中で、形だけでなく心の交流と心の高揚を図る
⑨県の企画する市民との共同イベント「西湘を考える県民の集い」には、メンバー3名が企画運営委員として参加し、市民が主体の各種市民活動が発表紹介された。

等々、サークル参加者がそれぞれの置かれた立場で、しっかりした基準を持ち、サークルで学んだことを実践している。

小田原のシンクタンク

「小田原市政政策統合研究所」が4月からスタートします。まちずくりのノウハウだけでなく、市民の精神を高めることが根本であるとの考えを、サークルメンバーの実践を通じて働きかけていきたいと思っております。

事務局便り

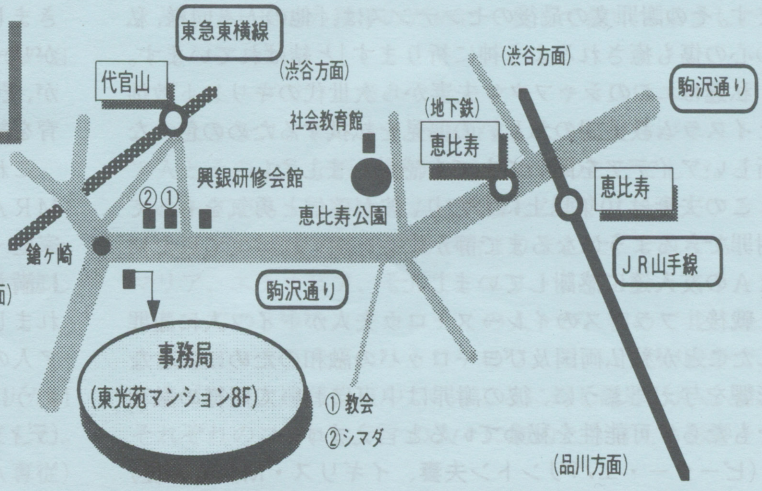
◇IMAJニュースの発行が大幅に遅れましたことをお詫びいたします。編集に当たっていた、柏原征則さんが留学準備のため、残念ながら3月で退職しました。環境問題について学びたいそうですので、皆さんからも宜しくご声援をお願いします。尚、去る5月末に開催された第23回MRA小田原国際会議やコー世界大会のニュース等を引き続きご報告致したいと思いますが、もし編集作業をボランティアでお手伝い頂ける方がおられましたら是非事務局までご連絡下さい。

◇1月からは和田マリアンネさんが事務局に専従として加わり、元テレビのプロデュサーの経歴を活かしたユニークなアイデアを繰り出しMRAに新風を吹き込んでくれています。若い人たちの活動も活発になりつつあります。大学生等若い方々が事務局にボランティアに来てくれるようになり大感謝です。

これから暫く暑さが続きます。皆様どうぞくれぐれもお身体をご自愛下さい。

IMAJ 国際MRA日本協会 事務局案内図

〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3－7－5
東光苑マンション802
TEL：03－5721－6861
FAX：03－5724－6880
E-MAIL：LEB03055@niftyserve. or. jp

●最寄駅

■JR山手線	：	恵比寿駅西口下車	徒歩7分
■地下鉄日比谷線	：	恵比寿駅5番出口	徒歩5分
■東急東横線	：	代官山駅	徒歩4分
■東急東横線	：	中目黒駅	徒歩5分